

首なし地蔵（一宮町遠田）

「おとっちゃん、いざなぎさんのお祭りやけんどわっしも連れていか。」

「お前はおつかあといっしょに來いな。おとっちゃんはお宮はんで、ごきとうをして米のよんなかがよいようにみんなとおがまにやいかんのでな。」

「よっしゃ、そないしょか。」

そばで吾作のおつかあは、

「なあおとっちゃん。あとであんまりお酒飲まんときなあ。いつでもよばれすぎて道のはたでねたりするんだから、矢折りの背やことでねとったら狸にばかされるぞ。氣つけてや。」

「分かつとる、分かつとる。じゃ先に行つとるよ。」

おとうさんはそう言って出かけて行きました。吾作の家は五人組の組頭（くみがしら）です。組頭になると刀をさすことを許されておりました。

遠田（とくだ）から多賀（たが）まで今のように自家用車もカブもない江戸時代のことです。おとうさんはテクテクと歩いて矢折りごえで行きました。

そのあとへ隣の孫作がきました。孫作は吾作と同じ年で正福寺の寺小屋へ行っていたのです。

「吾作さん、きょうはお寺のお師匠さんが農業往来（おうらい）（寺小屋の教科書）の読み方を教えてやろうと言って来たのでわしは今から行こうと思うんじゃ。いっしょに行けへんか。お祭りに行くんけ？」

「そやな、おつかあ、どうしょう。」

「せっかく教えてくれるんだから、お寺へ行つといで。」

「そないするワ、孫作待つとってんか。すぐ用意するから。」

二人は仲よく正福寺へ出かけて行きました。やがて日がくれ吾作は帰ってきましたが、おとうさんはまだ帰ってきません。八時になり、十時になり、…まだおとうさんは帰ってきません。ランプの下でつくろい物をしていたおかあさんが、隣りで今日の復習をしていた吾作に、

「なあ吾作、あんまりおとっちゃんが遅いので心配になってきた。またお酒によってどこか道ばたでねとるとちがうかしら。すまんけどちょっと見に行つてくれへんか。」

「うん、いつてたる。あんまり遅いな。また飲みすぎたのか分からへん。」

おかあさんのつけてくれたちょうちんを持って萩（はぎ）の方へおりていきました。矢折（やお）りの背（せ）へきかかると、むこうから歌をうたいながら、ほろよいきげんでおとうさんが、帰ってきています。

「あつおとっちゃん。むかえに來たよ。おそかつたなあ、みんな心配してたんだよ。」

「な、なに、おとっちゃんじゃと。何をいうこらッ矢折りの狸ッ。」

「ちがうよ。わし吾作だよ。」

「何、吾作だと、だまかすな、こら。いくらよっていたとてばかされないぞう。」

「ちがうつたら、わしだ、吾作だ。」

「こらッ、きょうというきょうは、矢折りの狸を退治してやる。これまでおおぜいの人をだまかした罰（ばつ）に、こんやは退治してやるッ。」

「おとっちゃん。わし吾作だよ。」

「さあこいッ。」

「刀をぬいたりして危いッ。」

「こらッ。こいッ。」

逃げまわる吾作を追いまわし刀で切りつけたからたまりません。とうとう吾作はかわいそうに首をはねられてしまいました。

「ハハハハ、矢折りの狸め、とうとうまいったか。これでみんなも大助かりだ、今にしっぽを出すじやろう。ハハハハ。」

おとうさんは足どりも軽く帰って行きました。

「あ、今帰つたぞ。え、え、何、吾作が迎えに行つたと。さては狸でなかったかッ。」

二人は矢折りの背へかけつけて見ました。吾作は首をはねられ倒れています。二人は泣く泣く正福寺へ手あつくほうむりました。地蔵さんをたてましたが、どうしたわけか首がすぐ落ちてしまいます。

首のないまま今も正福寺に静かにまつられています。

二百年もたっているいま、首をつけてあげるとひよっとするとひつつくかも知れませんが…。

